

渡辺金一名誉教授著作目録

A 著作

- 1 『ビザンツ社会経済史研究』 岩波書店 1968 iii+551 p. (以下『研究』)
- 2 『中世ローマ帝国』 岩波新書 1980 iii+234 p.
- 3 『コンスタンティノーブル千年』 岩波新書 1985 i+227 p.

B 論考

- 4 USIAKOI MISTHOTAI について——羅馬帝制期に於ける風州埃及所在皇帝御領地 (usiai) 経営の一側面—— 一橋論叢 25—6 (1950) pp. 57—77.
- 5 ヘレニズム埃及社会経済史の二大業績 一橋論叢 26—4 (1951) 特集: 歴史 pp. 140—168.
- 6 資料「ティベリウス・ユリウス・アレクサンダーの告示」をめぐる諸問題と原文の翻訳及付註 社会経済史学 17—5 (1951) pp. 57—88.
- 7 最近のビザンツ学界から 史学雑誌 61—7 (1952) pp. 51—69.
- 8 セロイコス王朝の財政機構 『現代歴史学の新動向』(増田四郎編, 1953 如水書房) pp. 25—53.
- 9 経済学 (増淵龍夫氏との共著) 一橋論叢 34—4 (1955) pp. 137—150.
- 10 ビザンツ期埃及の大土地所有制について 経済学研究 (一橋大学研究年報) 1 (1955) pp. 225—279. (『研究』(No. 1) 中に第7論文として収録)
- 11 ビザンツ帝国における大土地所有の問題——テオドシウス法典の分析を中心にして—— 一橋論叢 36—2 (1956) pp. 41—58. (第25回社会経済史学会(1956・名古屋)での報告)(『研究』(No. 1) 中に第5論文として収録)
- 12 続・ビザンツ帝国における大土地所有の問題——「プラクティカ」にあらわれた大土地所有の経済構造—— 一橋論叢 38—3 (1957) pp. 51—72. (第8回日本西洋史学会(1957・神戸)での報告)(『研究』(No. 1) 中に第6論文として収録)
- 13 マックス・ウェーバー——その古代史把握について—— 一橋論叢 39—4 (1958) 特集: 人と業績 pp. 51—79.
- 14 ビザンツ農民に関する若干の考察——オストロゴルスキーの「国家農民」論をめぐって—— 経済学研究 (一橋大学研究年報) 2 (1958) pp. 299—397. (『研究』(No. 1) 中に第8論文として収録)
- 15 10世紀のビザンツ村落の社会構造——マケドニア王朝の土地立法の分析—— 経済学研究 (一橋大学研究年報) 4 (1960) pp. 157—258. (『研究』(No. 1) 中に第

9論文として収録)

- 16 後期ビザンツ帝国の都市について 一橋論叢 44—6 (1960) pp. 73—96. (『研究』(No. 1) 中に第4論文として収録)
- 17 ビザンツ帝国における封建制の問題 歴史学研究 242 (1960) pp. 26—35. (『研究』(No. 1) 中に第2論文として収録)
- 18 ビザンツ都市の諸問題 社会経済史大系第2巻「初期中世」(東京, 1960) pp. 285—319. (『研究』(No. 1) 中に第3論文として収録)
- 19 中世キリスト教世界の生成と展開 『筑摩 世界の歴史 5』(筑摩書房, 1961) pp. 139—248.
- 20 ビザンツ帝国の社会と経済——土地所有の問題を中心として—— 『筑摩 世界の歴史 5』 pp. 249—257.
- 21 15世紀の東地中海 人文科学研究 (一橋大学研究年報) 6 (1964) pp. 115—221.
- 22 ビザンツ的思考世界についての覚書 言語文化 (一橋大学語学研究室) 1 (1964) pp. 71—86. (『研究』(No. 1) 中に付論として収録)
- 23 8世紀後半のイタリアとビザンツ・フランク・ローマ教皇 一橋論叢 53—5 (1965) pp. 551—577.
- 24 ビザンツ封建制の諸問題 社会経済史学 30—3/4 (1965) pp. 73—109. (フランス語版: Problèmes de la “féodalité” byzantine. Une mise au point sur les diverses discussions. in: Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences, Vol. 5, No. 1 (whole No. 5). Jan. 1965, p. 32—40, Vol. 6, No. 1 (whole No. 6). Sept. 1965, pp. 8—24). (『研究』(No. 1) 中に第1論文として収録)
- 25 テーベの土地台帳にあらわれた11世紀のビザンツ農村 経済学研究 (一橋大学研究年報) 9 (1965) pp. 145—209. (『研究』(No. 1) 中に第10論文として収録)
- 26 クアトロチェントのイタリアとオスマン帝国——15世紀のオリエント・ヨーロッパ交渉史の諸断面—— 『ヨーロッパ精神史の基本問題——下村寅太郎先生退官記念論文集——』(岩波書店, 1966) pp. 181—208.
- 27 ビザンツ史 『西洋史研究入門』(改訂版, 東京, 1966) pp. 166—175. (『研究』(No. 1) 中に, 増補加筆版を付録として収録)
- 28 Ostasien im “Frühmittelalter”——Ein Vergleichsversuch mit Byzanz. in: Byzantinische Forschungen, No. 1, 1966, p. 334—345.
- 29 15世紀のオスマン・フィレンツェ交渉史の側面 オリエント (オリエント学会) 9—2/3, 1966, pp. 187—198.
- 30 ユスティニアヌス帝新法第30考——古代末期の社会的諸矛盾の側面—— 一橋論叢 59—3, 1968, pp. 35—53.
- 31 正教世界の成立 『岩波講座 世界歴史 7 “中世1”』(1969) 第6章, pp. 184—224.
- 32 8—9世紀初頭のビザンツ帝国とフランク王国 『岩波講座 世界歴史 7 “中世1”』 第5章, pp. 153—181.

- 33 12世紀の西ヨーロッパとビザンツ 『岩波講座 世界歴史 10 “中世4”』(1970) 第3章第2節 pp. 130—149.
- 34 14・15世紀の東ヨーロッパ世界1, ビザンツ 『岩波講座 世界歴史 11 “中世5”』(1970) 第7章第1節 pp. 335—352
- 35 テッサロニケの「熱心党」について 一橋論叢 64—5 (1970) pp. 27—44.
- 36 Ein Beitrag zum weltgeschichtlichen Bild des Frühmittelalters. in: *Anticnaja drevnost i srednie veka* 10, Sverdlovsk, 1973, pp. 56—59.
- 37 ビザンツにおけるイデオロギーと社会的現実——H. G. Beck の若干の研究に寄せて—— 一橋論叢 72—6 (1974) pp. 1—15. (ドイツ語版: *Ein neues Forschungsfeld der Byzantinistik: Ideologie und soziale Wirklichkeit in Byzanz——Eine Stellungnahme zu einigen Arbeiten Hans Georg Beck's*——. in: *Hitotsubashi Journal of Economics*. Vol. 15, No. 1, 1974, pp. 11—18 and later.) (下記 No. 84 ベック『ビザンツ世界の思考構造』に付録として収録)
- 38 La peinture murale de TAKAMATSU-ZUKA et le monde extrême-oriental du haut moyen âge. in: *Hitotsubashi Journal of Economics*. Vol. 14, No. 2, 1974, pp. 1—8.
- 39 Max Weber und unsere Zeit. in: *Hitotsubashi Journal of Economics*. Vol. 16, No. 1, 1975, pp. 13—21.
- 40 「中世初期」地中海世界の社会経済的発展の総合的理解のために 一橋論叢 76—6 (1976) pp. 1—19.
- 41 歴史記述におけるビザンツ皇帝の虚像と実像——「続テオフィアネス」第4巻のミハエル3世について——『ヨーロッパ——経済・社会・文化——増田四郎先生古希記念論集』(創文社 1979) pp. 51—81.
- 42 L'état actuel des études byzantines. in: *Les actes du XVe congrès international d'études byzantines——Athènes, Septembre 1976, T. 1, Art et archéologie. Instrumenta Studiorum, Athènes, 1976*, pp. 126—127.
- 43 A propos d'une histoire comparée du monde méditerranéen à l'époque du haut moyen âge. in: *ANNUARIO*, Vol. 16 (1979—1980), Istituto Giapponese di Cultura in Roma, pp. 3—19.
- 44 帝王の光輝と限界——ビザンツ政治神学についての若干の覚書 一橋論叢 83—3 (1980) pp. 1—20.
- 45 君主間の付き合い——「ビザンツ一家」の理論—— 月刊百科 No. 210, Feb. 1980, pp. 15—20.
- 46 地中海的集落形成のエコロジー——内陸シリア北部の古代オリブ・プランテーション村落—— 論文集「地中海地域における集落形成の諸問題」(一橋大学地中海研究会, 1980) pp. 1—17.
- 47 経済発展に関する諸学説 『経済学大辞典』3 (東洋経済新報社, 1980) XVII/1, pp. 3—10.

- 48 なぜまたビザンツなのか——ビザンツ研究の提起するもの—— 一橋論叢 88—4 (1982) pp. 1—15.
- 49 Image d'autarchies villageoises dans les îles de la mer Egée—Essai de reconstruction—, in: Collected papers: Population Mobility in the Mediterranean World. Studies in the Historical and Contemporary Aspects. (一橋大学地中海研究会, 1982) pp. 117—124.
- 50 中世ギリシア人「中近東文化センター研究報告」No. 4, 1983, pp. 3—26.
(フランス語版: Les Hellènes au moyen âge—Une Aperçu sur leurs relations avec les Arabes, in: Studies in the Mediterranean World. Past and Present. Collected papers. 一橋大学地中海研究会, 1984, pp. 1—16.)
- 51 『一橋のささやかな学問』 橋間叢書 16 (一橋の学問を考える会) 1983, 26 p.
- 52 ビザンツ文学——英雄詩ディゲニス・アクリタス—— I & II プラティア (プラティア・ミコノス会) 2 (1983) pp. 1—8. 3 (1984) pp. 1—6.
- 53 ビザンツ理解とはなにか——その国家と社会を考えるにあたって—— 一橋論叢 92—3 (1984) pp. 1—16.
- 54 ビザンティン帝国 『平凡社百科事典 第12巻』(1985) pp. 443—448.
- 55 ビザンティン文学 『平凡社百科事典 第12巻』(1985) pp. 451—453.
- 56 ビザンツ人の世界——文学を通して見た—— I & II プラティア 6 (1984) pp. 1—9. 7 (1985) pp. 1—6.
- 57 オリエントリストのビザンツ像——リュッケルトの詩集「ヘレーニス」から—— 「オリエント学論集——三笠宮崇仁親王古希記念論集——」1985. pp. 379—392.
- 58 『ビザンツ式処世術』 新井経済研究所, 東京, 1985, 31 p.
- 59 『モデル・再分配社会——ビザンツ研究家から見たソビエト——』エグゼクティブ・アカデミー・シリーズ, 1986, 35 p.
- 60 Byzanz: Modell "Redistributions-" Gesellschaft. in: Collected papers: Studies in the Mediterranean World. Past and Present, X. (一橋大学地中海研究会, 1986) pp. 1—9.

C 研究ノート・学界展望

- 61 "Nomos Georgikos" 研究の近況 一橋論叢 30—5 (1953) pp. 71—90.
- 62 ビザンツ社会経済史研究の戦後における諸傾向について 社会経済史学 20—4/5 (特別号: 戦後における社会経済史学の諸傾向) (1954) pp. 1—12.
- 63 テマ制度成立の時期をめぐる論争の現況 史学雑誌 65—10 (1956) pp. 61—79.
- 64 "Patricius Romanorum" 称号の解釈をめぐる論争 一橋論叢 38—1 (1957) pp. 83—89.
- 65 ビザンツ帝国と中世オリエント——最近の研究成果の報告—— I, II & III オリエント学会月報 Vol. I, No. 12 (1958) pp. 1—9.; Vol. 2, No. 1 (1959) pp.

1—13.

- 66 中世ヨーロッパ世界の統一と分化 [I] [II] 一橋論叢 41—1 (1959) pp. 44—72.; 41—2 (1959) pp. 42—69.
- 67 テマ論争の新段階 史学雑誌 68—11 (1959) pp. 76—99.
- 68 「農民法」研究の新段階 一橋論叢 43—5 (1960) pp. 40—60.
- 69 ビザンツ理解への道——H. G. Beck の二点の近業—— 南欧文化 No. 3 (1976) pp. 40—56.
- 70 プロノイア問題の現況——整理と展望—— オリエント 20—1 (1977) pp. 213—228.
- 71 エーゲ海島嶼ナクソス：歴史的諸空間の累積——宗教事情ノート—— 一橋論叢 80—6 (1978) pp. 89—100 (フランス語版：Vie religieuse dans une ile égéenne —Naxos—. in: Studies in Socio-Cultural Aspects of the Mediterranean Islands. 一橋大学地中海研究会, 1979, pp. 1—12.)

D 書評

- 72 村川堅太郎「羅馬大土地所有制」, 社会構成史大系 2 (1949) 社会経済史学 16 (1950) pp. 126—131.
- 73 A. A. Vasiliev. Justin the First, An Introduction to the Epoch of Justinian the Great, Dumbarton Oaks Studies I, Harvard University Press, 1950. (ユスティン1世) 一橋論叢 28—4 (1952) pp. 129—140.
- 74 Germaine Rouillard, La vie rurale dans l'Empire byzantin. (Collège de France, Fondation Schlumberger, pour le byzantinisme) Paris, 1953. (ビザンツ帝国における農業生活) 一橋論叢 33—6 (1955) pp. 77—89.
- 75 G. Ostrogorskij, Pour l'histoire de la féodalité byzantine. (Corpus Bruxel-lense Historiae Byzantinae. Sudsidia I) Bruxelles. 1954. (ビザンツ封建制史考) 史学雑誌 66—6 (1957) pp. 60—82.
- 76 A. G. Gibb-Hamilton, Arab-Byzantine Relations under the Umayyad Caliphate. Dumbarton Oaks Papers XII, Dumbarton Oaks, 1958, pp. 219—233. オリエント学会月報 Vol. 3, No. 3 (1960) pp. 8—13.
- 77 G. Ostrogorskij, Pour l'histoire de l'immunité à Byzance; traduction par H. Grégoire. in: Byzantion XXVIII (1958) pp. 165—254. (ビザンツ・イムニテート制史考) 史学雑誌 70—1 (1961) pp. 68—89.
- 78 米田泰治「ビザンツ帝国」(角川書店, 1977) 史学雑誌 87—4 (1978) pp. 94—105.
- 79 杉村貞臣「ヘラクレイオス王朝時代の研究」(山川出版社, 1981) 史学雑誌 91—3 (1982) pp. 99—106.
- 80 井上浩一「ビザンツ帝国」(岩波書店, 1982) 史学雑誌 92—2 (1983) pp. 91—101.

E 翻訳

- 81 マックス・ウェーバー『古代社会経済史——古代農業事情——』（渡辺金一・弓削達共訳、上原専禄・増田四郎監修）東洋経済新報社、1959、iii+546 p.
- 82 メリクシエビリ「最古の階級社会の性格の問題によせて」（渡辺金一・松木栄三共訳）オリエント 10—3/4 (1967) pp. 49—79.
- 83 ビグレフスカヤ他『ビザンツ帝国の都市と農村』創文社歴史学叢書、1968、103 p.
- 84 ベック『ビザンツ世界の思考構造』岩波書店、1978、v+235 p.
- 85 ベック「ビザンツ帝国の国制」南欧文化 5 (1978) pp. 82—99.
- 86 ベック「社会を映し出す鏡としてのビザンツ文学」思想 654 (1978) pp. 105—120.
- 87 ベック「ビザンツ学の今日」（訳者解説付き）宗教と文化 8（聖心女子大学キリスト教文化研究所）1982、pp. 1—47.
- 88 ゲミストス・プレトン「法の精神」の祖型——ビザンツ文人のペレストロイカ建白書——一橋大学社会科学古典資料センター スタディ・シリーズ 14 (1987) pp. 1—14.
- 89 クロード・カーエン『比較社会経済史——イスラム・ビザンツ・西ヨーロッパ』（渡辺金一・加藤博共訳）創文社歴史学叢書、1988、i+152 p.（渡辺による解説付き：「同一地点への合流現象を示す諸社会の比較史研究」）

F その他

- 90 『平凡社 世界歴史事典 巻24 史料篇西洋I』（1955）〔ビザンティン帝国篇〕 pp. 177—195.（史料状況概観および主要史料抄訳）
- 91 Einige Notizen über den XII. internationalen Byzantinistenkongress——Byzantinistik und Japan. in: Hitotsubashi Journal of Economics. Vol. 3, No. 1 (1962) pp. 73—82.
- 92 第12回国際ビザンツ学会議に出席して 社会経済史学 28—2 (1962) pp. 81—95.
- 93 ヨーロッパ・1979年5—7月——新聞の切抜き帳から——創文 No. 191, 1979, pp. 2—11.
- 94 “ユートピア”の周辺——トマス・モアの取材源——一橋大学社会科学古典資料センター年報 No. 4 (1984) pp. 3—5.

(1988年9月10日現在——大月康弘)